

近世のムラユ港市国家と海民

西尾 寛 治

はじめに

近年、「交易」や「海域世界」という観点から東南アジア社会の特徴やその歴史的变化を追求する試みが進展しつつある。もとより「交易」は東南アジア前近代史における重要テーマのひとつである。だが、近年の研究は、交易史自体の精緻化より、むしろ交易の発展が在地社会に及ぼした諸変化を追求することに関心が向けられている。こうした傾向は、東南アジア史研究が成熟を深めつつあることを示すものだが、「港市国家」(port-polity)論^①(Kathirithamby-Wells and Villiers 1990)や「近世」(early modern)という時代区分の導入(Reid 1993a)は、この過程の中で新たに提起されたものである。また、「海域世界」のネットワークやダイナミズムに注目し、従来の陸地や国民国家中心の歴史を相対化しようとする試みも、やはり

一九九〇年頃以降に顕著な傾向^②である。そうした中で、東南アジアの「海民」も研究対象として次第に注目され始めている^③。以上のような近年の研究動向を一応踏まえつつ、本稿では、前近代の東南アジアに形成された海上交易依存型の国家である港市国家を取り上げる。そして、その成立や発展過程の考察から、海域世界における人々の相互関係並びに秩序の形成という問題を論じてみたい。

海に適応した生活を営み、漁撈や航海術などに卓越した技能を発揮した人々は、海洋民、海上民、海人あるいは海民などと呼ばれる。無論漂海民はその典型であろう。東南アジアでは、メルギー諸島のモウケン(Mawken)、マラッカ海峡南域のオラン・ラウト(Orang Laut)、スールー海のバジャウ(Bajau)などがそれに該当する(Sopher 1965: 50)。だが、東南アジアの海域で活躍したのは、そうした海に特化した人々ばかりではない。ブギス人のように、本

来陸地民として生活していた人々が状況に応じて海民として活動するようになった事例も見られた。スラウエシのブギス人は一般に農民であったが、一七世紀後半以降そこから流出していったブギス人は、むしろ交易商人、船員、漁民、海賊、戦士として名を馳せた(Linneton 1975; 立本 1998)。こうした海民は、オランダ人が「王国の筋肉と腱」と表現したように(Andaya, L. Y. 1984: 39)、東南アジア島嶼部の港市国家でしばしば重要な役割を担っていた。ところが、彼らと港市国家の関係については、文献資料の質的・量的な制約もあって、港市国家側が海民を意のままに従属させていたという見方が一般的であった(Logan 1847: 336; The Piracy and Slave Trade of the Indian Archipelago 1849: 584-88, 634-35; Sopher 1965: 90, 93-94)。しかし、一九七〇年代以降には、そうした見解を疑問視させるような事例研究もいくつか提出されている。スールー海のサマ語系漂海民の歴史的考察を試みた床呂の研究も、そうした研究のひとつに挙げられよう。

床呂は、一八世紀後半頃スールー王国に従属する「海産物採集専門の漂海民」にすぎなかったバジャウが、かつては自立性の高い海民集団であったと指摘している。彼によれば、一六〇一八世紀に別の名称で文献資料に登場するバジャウは、ブルネイ、スールー、マギンダナオのどれにも

完全には従属せず、海賊活動を展開する集団であつたらしい。彼らの港市国家に対する忠誠は可変的で、不当な対応を受けた場合は、別の港市国家へ忠誠をシフトすることで対抗し、時には単独で活動することさえあつたという。すなわち、当時のバジャウは、港市国家に対する忠誠を臨機応変に締結・解消する、自立性に富んだ海民集団であつたらしい。床呂は、スールー王国のタオスグ、サマ、バジャウというハイアラキーカルな民族編成について、一八世紀後半以降の歴史の過程で「創造」された枠組みにすぎないと結論している(床呂 1992: 5-7; 床呂 1999: 51-55)。

以上の床呂の研究は、海民集団と港市国家の関係も歴史的にかなり変化しうることを示唆している点で非常に興味深い。他方、問題となるのはおそらく以下のような点であろう。第一点は、海民集団と港市国家支配者との関係を二項対立的に捉えている点である。海民集団が独立した勢力として活動した場合もあつたというが、それは必ずしも港市国家と完全に絶縁しようとしたことを意味するものではない。多くの場合は、複数の港市国家の間で忠誠をシフトさせていたという点に留意すべきである。それは、海民集団と港市国家支配者とは、基本的に利用し利用されあう相互依存関係にあつたことを示している。それゆえ、海民集団と港市国家支配者とを海と陸という対立で捉える視点は、

さほど有効なものとは思われない。より重要なのは、両者の関係性に注目することであり、その相互依存関係について分析を進めることであろう。第二点は、海民集団の「忠誠を締結・解消する臨機応変さ」が、海域世界のみの特徴ではないという点である。こうした機敏な反応は、例えばスマトラやボルネオの内陸民の間でもしばしば見られる(弘末 1999; 山本 2000)。さらにそれは、「ヤンダラ国家論」(Walters 1982)や「銀河系政体論」(Tambiah 1976)でも指摘されているように、東南アジアの前植民地期国家全般に認められるものである。

本稿では、マラッカ海峡南域に形成され、東南アジア随一もしくは有数の交易センターとして繁栄したムラユ港市国家における海民集団の事例を考察する。すなわち、ムラカ王国(一四〇〇頃～一五二一年)及びジョホール王国(一五二八頃～一七七八年)におけるオラン・ラウト、またジョホール・リアウ王国(一七二二～一八二四年)におけるブギス人である。以下では、これらの海民の動向に注目しながら、この地域の港市国家の繁栄が海民集団の活動に依存していたことを明らかにしたい。そして、その上で、海民とムラユ港市国家支配者との相互関係について若干の検討を加えたい。

一 一五世紀初期のムラカ

ポルトガル人トメ・ピレスの『東方諸国記』によれば、ムラカの創始者は、ジャワの支配に反逆したパラメスワラというパレンバン¹⁾のムラユ人王族である。パレンバンを出奔したパラメスワラは、シンガプーラ、ムアルを経て、ムラカに到る。彼の亡命に同行したのは、その側近とシンガプーラ及びパレンバン周辺のオラン・ラウトであった。パラメスワラがシンガプーラに移ると、彼らはシンガポール海峡に近いカリムン島に住み、またムアルに移ると彼らはムラカに移り住んだ。その後、オラン・ラウトはよい土地を発見し、彼らだけで決議した後、パラメスワラに移住を勧めた。パラメスワラは、そこがよい土地であると確認したら移住すると返答した(ピレス 1966: 380-87)。その時、パラメスワラとオラン・ラウトの間には、以下のようなやりとりが交わされたという。

セラテ人(オラン・ラウト)は次のように答えた。「私たちもまたパレンバン(パレンバン)の古い領主であるあなたの支配下にあり、常にあなたと行動をとめます。もしその土地があなたにとって良いと思われしましたら、あなたは私たちの好意に対して慈悲を示して下さるのが当然です。また報酬がなければ私たちも

これほどは働きません。」パラミスワラ（パラメスワラ）もその通りだと答えた。セラテ人は異口同音に「もしあなたがその土地を良いと思われて、そこに移られることを希望されるなら、あなたは王となり、王と称することができることによって、私たちに名譽と慈悲を与えることができるようになるではありません。」と述べた。彼はこれに答えて、「諸君に対してそうすることは自分の意志でもある。」とこたえた（ ）は引用者（ibid.: 387, 88）。

また、パラメスワラの移住後の経過は次のようである。かれら（オラン・ラウト）はパラミスワラに次のように述べた。「私たちが（中略）この土地のことをお知らせしたのだというのを思い出していただけましたら、私たちにいくらか名譽を授けていただくようお願いしたいのです。」パラミスワラはこの請願にこたえてかれらをマンダリ（官僚）に任命した。それは貴族という意味である。（中略）それ以来かれらはずっと貴族で、マラカ（ムラカ）のマンダリはすべてかれらの子孫であり、国内で確認されていることに従えば、（ムラカの）代々の王は母方で彼らの血統をひいているということである。上記の漁師（オラン・ラウト）たちはこのパラミスラの手によってマンダリに任命されたので、常に王の側に随っていた。（中略）かれらもまた王が自分

たちに対して行った恩恵を認めた。かれらは熱心に王に随行し、真心をこめ、忠実に彼に奉仕し、かれらの友情には心がこもっていた。（中略）かれらは王を喜ばせることに努力した。かれらの誇りはディオゴ・ロペス・デ・セケイラがマラカに到着するまでずっと続いた（ibid.: 388, 89）。

ピレスの記述には、次のようないくつかの注目すべき点がある。

まず第一は、ムラカが、ムラユ人王族、パラメスワラとオラン・ラウト集団との結びつきを基礎に成立した港市国家であったことである。パレンバン3の古い領主、パラメスワラの出奔に同行したのは、シンガプーラ周辺のオラン・ラウト集団とパレンバン周辺のオラン・ラウト集団3であった。これらのオラン・ラウト集団は、一貫して彼と行動をともにしている。

第二は、ムラカ形成前のパラメスワラとオラン・ラウト集団の関係が、絶対的な主従関係というよりも、むしろ対等に近い関係であった点である。オラン・ラウトは、国造りの土地の情報を提供した後、パラメスワラに報酬を迫り、「報酬がなければ私たちもこれほどは働きません」と述べている。これは、報酬がなければ今後は服属を拒否するという脅迫とも解釈できる。一方、パラメスワラは彼らの要求

を当然と受けとめている。そして、報酬を約束し、その約束を果たしている。

第三は、ムラカの形成が、オラン・ラウト側の主導によって進められている点である。国造りの土地の情報や移住の提案は、オラン・ラウトの側が提出した。その提案は、事前に彼らだけで決議したものである。注目されるのは、上の引用中の「もしあなたがその土地を良いと思われて」に続くオラン・ラウトの発言であろう。これは、パラメスワラに新たな王国を創始することを勧めた発言と受け取れる。

第四は、オラン・ラウトが、亡命王族の授与した貴族の地位を十分な報酬と受けとめている点である。彼らはその後、パラメスワラに忠実に奉仕しているから、「貴族の地位」が彼らの要求した「名誉と慈悲」にふさわしいものであったことは明白である。だが、その当時ムラカには、まだ王国と呼べるようなものはなにひとつ実在しなかった。存在したのは、ただパラメスワラを中心とした小規模な人の集団に過ぎない。すなわち、「貴族の地位」は何ら実質的内容の伴わぬものであった。なぜオラン・ラウトはそうした「貴族の地位」に満足したのか。それについては、後に検討するとして、ここではさし当たり、オラン・ラウトの忠誠の根源がムラユ人支配者の授与した名目的な位階にあった点を確認しておきたい。

第五は、ムラカの貴族の家系がオラン・ラウトに起源する家系であるという点である。ピレスは、上記の引用に続けて、「その時かれら（オラン・ラウト）の五代目の孫がラサマナ（ラクサマナ [Laksamana：海軍長官]）とベンダラ（ブンダハラ [Bendahara：宰相]）になっていて」（）は引用者（ibid：389）と述べている。ラクサマナやブンダハラは、いずれもオラン・ブサル（Orang Besar）と総称された最上位の高官のひとつである。これらは特定の貴族の家系が世襲した終身制の官職であった（Muhammad Yusoff Hashim 1989：149-52）。したがって、ピレスの叙述に従えば、ムラカは、オラン・ラウト及びその子孫の官僚によって運営された港市国家ということになる。

第六点は、ムラカの王も母方を通じてオラン・ラウトの血統を継承しているという点である。ムラユ語史料『スジャラ・ムラユ』を分析してみると、ムラカ王九名のうち五名はブンダハラ家出身の王妃の実子である。他方、ブンダハラ家出身の王妃の子でないことが確認できるのは、第四代、第六代、第七代の三名のムラカ王だけである（西尾 1995：3940）。したがって、ピレスの言うほどではないが、ムラカ王の多くが母方を通じてオラン・ラウトの血統を継承していたことは確かである。このことは、ブンダハラ家の息女が常に王家に嫁入りしていたことを意味する。すなわち、

ムラカ王家とオラン・ラウト出身の宰相家の間には婚姻連帯 (marriage alliance) が結ばれていたのである (ibid.: 32)。

以上の考察から、ムラカの形成は、土地の選定から王国の形成に至るまでオラン・ラウト側の主導によって進められていたことがわかる。さらに港市国家の運営も、オラン・ラウト出身の官僚に依存していた。ムラカは、海民の主導によって形成され、発展した港市国家であったといっても過言ではない。

二 一七〜一八世紀のジョホール

ジョホール王国は、ポルトガルのムラカ王国征服（一五一一年）後、落ち延びたムラカの支配層によって一五二八年頃マレー半島南端に樹立された。そのため、まったく別の王国というよりも、場所を移して再建されたムラカ王国という性格を多分にもっていた。ムラカ脱出後の支配層の移動を追ってみると、ビンタン島、スマトラ東岸のカンパルへを経て最終的にジョホール川下流域に拠点を構えている。ピレスの記述が示すように、これらの地域はいずれもオラン・ラウト集団の活動圏内に位置した（ピレス 1966: 438-40, 443-44）。ムラカの支配層がオラン・ラウトの支持

を背景に王国を再興しようとしていた様子が見て取れよう。

実際、ムラカからジョホールへの移行期、さらにジョホール成立以降も、軍事力の中核をなしたオラン・ラウト集団^⑥は、ムラユ人支配者によく服属していたといつてよい。一六世紀初期から一七世紀中頃まで、ジョホールは、スマトラ北端のアチエ王国やポルトガル領マラッカと激しい抗争を展開した。この間、他の二勢力に王都を進攻されたジョホールは度々亡国の危機に瀕した^⑦。だが、その都度ジョホール川下流域の各地やビンタン島などに新都を築いて再び勢力を盛り返した (Gibson-Hill 1955: 135-97)。オラン・ラウト臣下が依然王に忠誠を尽くしていたことは、ジョホールの發揮したこのような驚異的な復元力からも明らかである。

一七世紀中頃以降、オランダとの友好関係を背景に交易を發展させ、また支配地域の拡大を達成したジョホールは、東南アジア有数の交易とイスラームの中心として繁栄した (Andaya and Andaya 1982: 68-71)。だが、一七世紀末に国王の弑逆事件が発生し、その後は領内各地で紛争が多発した。そして、結局一八世紀初期シアクのミナンカバウ王族にあっけなく征服されてしまった。以下では、一七世紀末以降に発生した二つの事件を通して、オラン・ラウトの忠誠についてさらに考察してみよう。

二一 スルタン・マフムード弑逆事件（一六九九年）

これは、執拗に臣下虐待を繰り返した暴君スルタン・マフムード (Sultan Mahmud) : 在位一六九五〜一六九九年) が、貴族の共謀によって弑逆された事件である。それは、貴族の共謀による弑逆事件という点で、またムラカ王家直系の王統を断絶させたという点で、ムラカ及びジョホール史上を通じて前代未聞の事件であった (Andaya, L. Y. 1975: 182-95; 西尾 1990)。

スルタン・マフムードの異様な性格や行動については、ムラユ語史料のみならず欧文の諸記録でも言及されている。彼は狭量で自制心に欠け、男色に耽り、貴族の妻や外来商人を虐待したばかりか、臣民を恣意的に殺害していた。一六九五年即位したマフムードは、常に取り巻きを従え、そうした愚行を繰り返していたという (Hamilton 1930 vol. 2: 95-7)。この頃からジョホールは政治的・経済的混迷を深めていった。一六九九年一月までの四年間、マフムードの統治の開始はオランダ側に一切通知されなかった (GM dl. 6: 57)。オランダ領マラッカの長官ホフェルト・ファン・ホールン (Govert van Hoorn) : 任期一六九六〜一七〇〇年) によれば、かつて栄えた交易も彼の任期中に完全に衰退し、わずかに五、六隻の中国船だけが毎年入港していた

とらう (ARA VOC1648: fol. 12)。そして、一六九九年一月 (または四月) 頃、ジョホール宮廷はマフムードの寵臣シャーバンドル (Syahbandar: 港務長官) の影響下におかれた。当時のブンダハラは、依然多数の配下を擁していたとはいえ、その実権を既に剥奪されていた (ARA VOC1623: fols. 64-6)。なお、彼は所領地没収などの迫害をマフムードから受けている (Ibid.: fol. 69)。こうして弑逆事件の数カ月前には、ジョホール宮廷は、マフムード及び彼の寵臣とブンダハラを中心とする実権を剥奪された貴族とに完全に分裂してしまっていた。

この間のオラン・ラウトの動向をみてみよう。一六九八年九月頃、リアウ・リング諸島のドウリアン海峡からジョホール川河口に至る海域で、オラン・ラウトの海賊活動が活発化している。オランダ領マラッカでは、商船襲撃の知らせが連日のように届いたため、同地を出航する船舶は皆無であった。また、バタヴィアからの米の供給が途絶え、マラッカは深刻な食糧不足に陥ったという (ARA VOC1609: fols. 100-2)。その後、彼らの海賊活動はマラッカ海峡各地に拡大した。そこでオランダは、一六九九年一月、海賊活動の取り締まりをジョホールに度々要請した (GM dl. 6: 57)。そこでスルタン・マフムードも、同年三月末、ようやく海賊活動の禁令を領内各地に通達した (ARA VOC1623:

fol. 69)。この禁令後、オラン・ラウトは海賊活動を停止したという (GM dl. 6: 76)。

ジョーホールのオラン・ラウト集団がこれほど盛んに海賊活動を行うのは、無論きわめて異例なことである。平常時のオラン・ラウト集団は、交易用海産物の収集、港市周辺海域の巡視、来港する商船の保護や誘導などを任務としていたからである (Andaya, L. Y. 1975: 44)。このようなオラン・ラウト集団の海賊活動は、明らかに極度の交易不振を背景として発生したものである。しかし、それが彼らの自発的行為かあるいは上位者の指示によるものかは不明である。興味深いのは、オラン・ラウト集団がマフムードの禁令によく従っていることである。この点に留意すると、彼らの海賊活動がマフムードないしはその寵臣からの指示であった可能性も否定できない。しかし、いずれにせよ確実なのは、オラン・ラウト集団が暴君マフムードに忠実であったことである。

一六九九年八月、スルタン・マフムード弑逆事件が決行された。ここにムラカ王家正統の血筋は絶え、ジョーホールの王位はブンダハラへ移った。そして、事件後に宮廷の要職を占めたのは、新王スルタン・アブドゥル・ジャリル (Sultan Abdul Jalil: 在位一六九九〜一七一八年) の実弟たちであった (Lewis 1982: 221-35)。弑逆事件直後、オラン・ラウト

は、古来連綿と続いてきた由緒ある王の血統が途絶えたことを悲嘆し、「もはやジョーホール王は存在しない」と言い切った。また、「王位篡奪者に服属するより、パレンバン王に仕える」と公言した。そして、弑逆されたマフムードの報復を企む者さえいたらしい (ARA VOC1623: fol. 12-13)。新王に対するオラン・ラウトの臣属拒否は、事件後一年余り続いた。しかし、その後は多くの者が妥協の道を選び、新王に服属したという (Andaya, L. Y. 1975: 189-90)。

弑逆事件後の動向で注目されるのは、オラン・ラウトがムラカ王家の血統を重視している点であろう。彼らがパレンバン王に仕えると公言したのも、実はそのことと無関係ではない。プレスや『スジャラ・ムラユ』が記すように、パレンバン王家はムラカ王家の姻戚に当たるからである (プレス 1966: 380; SMr: 56-58)。それとは対照的に、マフムードの支配者としての適性は一切問題とされていない。事実、オラン・ラウトは暴君マフムードによく服属していた。したがって、支配者の血統以外の諸要因が、彼らの「忠誠の選択」にほとんど影響を与えていないことは明白である。

二二一 ミナンカバウ王族ラジャ・クチルのジョホール
征服（一七七八年）

一七七八年三月、ラジャ・クチル (Raja Keci) 率いるシアク軍の進攻の前にジョホールはあつげなく占領されてしまった。その当時ジョホールに滞在していたポルトガル人によれば、戦力的にはジョホール軍がはるかに優位でありながら、その士気はけつして高くなかつたらしい。殊にジョホール軍の中核をなすオラン・ラウト戦士は戦意に乏しく、戦闘初期の段階でこぞつてシアク側に寝返つたといふ (Hughes 1935 : 129-30)。ジョホールのオラン・ラウト戦士はなぜ離反したのか。ムラユ語史料『トーフアット・アル・ナーフィス』(Tuhfat al-Nafis) と『ヒカヤット・シアク』(Hikayat Siak) には、その経緯が詳しく記されている。まずジョホール寄りの視点で記された『トーフアット・アル・ナーフィス』^③を参照してみよう。

艦隊の配備を完了したラジャ・クチルは、宣伝工作に通じた腹心の部下を、ジョホール川河口とシンガプーラへ派遣した。彼は、甘言をもつてその地域のオラン・ラウトに接近し、次のように言つた。すなわち、「ラジャ・クチルは先王の実子である。今まさに彼はジョホールに到り、即位せんとしてゐる。彼に服属しない者は、

史苑（第六二巻一号）

先王のダウラツ (Daulat : ムラユ人支配者が所有した超自然的力) に打たれ、子々孫々まで無事ではなからう。だが、先王の子に服属する者は恩賞を賜るであらう。ラジャ・クチルは、オラン・ラウトの首長たちに下賜するための立派な布を既に沢山用意しておられる。」と述べた。それを聞いたオラン・ラウトたちは、「ラジャ・クチルよ、どうぞジョホールへお越し下さい。我らはあなたに服属します。」と答えた。その後、その部下は、エンチツ・ブン (ラジャ・クチルの母) の父であるラクサマナに会い、ラジャ・クチルの書状を手渡した。するとその書状を読んだラクサマナも離反した。その後、ラジャ・クチルの艦隊がジョホールに進攻した時、オラン・ラウトはそれを王都へ通報しなかつた () は引用者) (TN : 187-18)。

他方、ラジャ・クチル側の視点で記された『ヒカヤット・シアク』^④には、以下のように述べられている。

ラジャ・クチルはジョホール王へ書簡を送り、先王の復讐を果たす決意を通告した。(中略)先王の遺児の噂は広く知れ渡り、ラジャ・スガラ・スラット (Raja Negara Selat : オラン・ラウト首長の称号) も、配下のオラン・ラウトを率いてラジャ・クチルの下へ参集した。(中略) 陛下 (ラジャ・クチル) はジョホールへ出撃され、陛

下の下に参集していた二つのオラン・ラウト集団もそれに従った。陛下がジョホール川河口に到達すると、驚愕したそのオラン・ラウトは、「我らの主が到来した。」と叫んだ。ラクサマナの配下のオラン・ラウトたちも、陛下と対面するためにやってきた。ジョホール川河口のオラン・ラウトは、「本当に我らが主の子ならば、海水を真水に変えて下さい」と言った。陛下は「よし」と答え、籐を渦巻状に巻いて海中に入れた。陛下は、「まことに（私が）ジョホール王の子なら、神よ、海水を真水に変え給え。」と祈念した後、その渦巻状の籐の中に入った。その後、人々が籐の中の水を汲み上げて飲んでみると、海水は冷たい真水に変じていた。驚喜したジョホール川河口のオラン・ラウトは、「彼こそ我が主、我が王だ。」と叫び、陛下に服属した（ ）は引用者（HS: 125）。

以上の二つの叙述を比較すると、次のような共通点が指摘できよう。

- (a) ラジャ・クチルが、弑逆されたスルタン・マフムードの遺児と称したこと。
- (b) ムラカ王家の血統を引くジョホール王が、超自然的力の所有者と認識されていること。
- (c) 以上二つが、オラン・ラウトの離反に関わる要因であ

ること。

そのうち、(a)はマフムード弑逆事件の分析結果と対応する。ただし、事件叙述の文脈に従えば、重要なのはむしろ(b)であり、(a)が意味をもったのは(b)が了解されていたからである。実際、ラジャ・クチルがスルタン・マフムードの太子であると認知されたのは、彼自身が超自然的力を開示できたことによる。その時、クチルが海水を真水と化すよう求められている点に留意したい。それはかつてムラカ王家の先祖が発揮したといわれる超自然的力であった(SMS: 25)。結局、ムラユ語の事件叙述から読み取れるのは、「ムラカ王家の血統の継承者は超自然的力の所有者」という認識が、「ムラカ王家の血統尊重」の根源的理由であったということである。その超自然的力とは、『トーフアット・アル・ナーフィス』の事件叙述で言及されているダウラツである。ダウラツはムラユ王権の神聖性の観念⁽⁵⁾である。ムラユ人支配者に対する不服従行為はドウルハカ(Derhaka)といわれ、そうした行為をなす者は、まるで雷に当たったかのようにダウラツに打ちのめされると観念されていた(Wilkinson 1932 part1: 275-76; Skeat 1965: 24)。ムラユ人支配者は即位儀礼中にこの超自然的力を神から授与されたとされる(富沢 1987: 43-45)。だが、本来ダウラツとは、ムラカ王家とその子孫だけが所有した超自然的力であった。『スジャ

ラ・ムラク』によれば、ムラカ王家はイスラーム布教の英雄ラジャ・イスカンドル・ズルカルナイン(Raja Iskandar D'zulqarnain)の末裔とされる(SMf: 59, 81)。ダウラツとは、その「ラジャ・イスカンドル・ズルカルナインの子孫に授与される神の恩寵」(SMS: 25)であった。無論こうした観念は、王権の支配を正当化するために考案されたものである。しかし、ここでは、そうした支配者側の論理が、ジョホールのオラン・ラウト集団の「忠誠の選択」に大きな影響を与えていることに注目しなければならない。ジョホールとは、オラン・ラウト集団の忠誠の上に存立した港市国家であった。

三 一八世紀のジョホール・リアウ

ジョホール王国の崩壊後、ラジャ・クチルに従属していたジョホールの王族は、ブギス人の加勢を得てリアウ島を中心に新たな王国を形成した。いわゆるジョホール・リアウ王国である。この王国は、一八世紀初期以降、東南アジア有数の港市国家に発展した。ここでは、この王国の成立・発展の過程を、ブギス人との関わりを通して考察してみよう。

三二一 ジョホール・リアウの形成

一七世紀中頃以降、南スラウエシのブギス人は、マカッサル戦争(一六六六〜六九年)及びそれに続く戦乱を避けて故郷を離れ、東南アジア各地へ流出していった。いわゆる「ブギス人のディアスポラ」である(Pelras 1996: 143-45, 320-22)。人口密度が低かったマレー半島は彼らに注目され、一八世紀初め頃までに、リンギ、スランゴール、ランガツトなどにブギス人の定住地が形成された。一七〇二年当時、リンギ在住のブギス人は三〇〇〜四〇〇人であった(GM dl. 6: 186)。また一七二二年頃のオランダ人の推計によれば、マレー半島在住のブギス人は約三〇〇〇人であった(Andaya, L. Y. 1975: 300)。当初、上記定住地のブギス人はジョホールの緩やかな支配に服していた。だが、やがて彼らはスズなどの交易を独自に展開するようになり、ジョホールやオランダ領マラッカとしばしば紛争を引き起こした。とはいえ、特有の鉄製鎧を装着したブギス人は、その勇猛さと卓越した練船術をいかんなく発揮して不敗を誇った。こうしてブギス人は、一八世紀初期までにマレー半島西岸に独立した勢力を形成した(Andaya and Andaya 1982: 80-81)。さて、ジョホール・リアウ王国形成の過程を辿ってみよう。

一七一八年三月、ジョホール占領後のラジャ・クチルは、スルトン・アブドゥル・ジャリルをブンダハラに降格し、その娘と結婚してジョホールを支配した。ところが、彼の素性に疑惑が生じ、社会不安が広がった。この頃アブドゥル・ジャリルはトレンガヌへ逃亡した。そこで、ラジャ・クチルは王都ジョホール・ラマを放棄し、シアクへ帰還した(GM di. 7 : 360-61)。同年七月、ダエン・マレワ(Daeng Marewa)率いるリンギのブギス人勢力が、オランダ領マラッカに亡命していたジョホールのブンダハラに加担し、シアク軍と海戦を展開する。その後両者は和議を結び、ラジャ・クチルに解放されたジョホールの王族はブンダハラの下に送られた (ibid : 361)。

一七一九年、ラジャ・クチルがリアウに拠点を形成する。彼は反抗的な一部のオラン・ラウト首長を殺害し、オラン・ラウトを完全に服属させた (ibid : 527)。他方、トレンガヌのアブドゥル・ジャリルは、パハンへ移動し、マラッカから来航したブンダハラや王族の一行と合流した (ibid : 459)。一七二〇年、リンギのダエン・マレワは、スランゴールとマラッカ近郊のブギス人を支配下においた (ibid : 538, 539-40)。こうして一七二〇年頃、三つの勢力がマレー半島周辺に形成された。そのうち、活発な軍事行動を展開したのはラジャ・クチルである。一七二一年三月、彼はリンギに進攻

したが、ブギス勢に敗北した (ibid : 562)。他方、同年十一月には配下をパハン川河口へ派遣し、アブドゥル・ジャリルを殺害させ、その一族をリアウへ連行させた (ibid : 590)。そして、同年十二月には再びリンギへ進攻した。この時、ラジャ・クチルの艦隊約一〇〇隻に対し、ダエン・マレワの艦隊はわずか五〇隻であった。だが、戦力的に劣ったブギス勢がラジャ・クチル軍を撃退した。さらにブギス勢は、逃げるラジャ・クチル軍を追走して一気にリアウまで進攻した。そして、リアウからラジャ・クチルの勢力を一掃してしまった。そのため、ラジャ・クチルはやむなくシアクへ撤退した (ibid : 598-99, 617-18)。

さて、ダエン・マレワのリアウ解放後、ラジャ・クチルにレガリアを持ち去られたことが判明する。そこで、ジョホールの王子ラジャ・スライマン (Raja Sulaiman) は、ダエン・マレワなどブギス人五兄弟にレガリアの奪回を要請する。ムラユ語史料『シルシラ・ムラユ・ダン・ブギス』によれば、この時ラジャ・スライマンの提案によって、両者は以下のような誓約を結んだという (SMDB : 67)。

- ① ラジャ・スライマン及びその子孫が王位を継承する。
- ② ラジャ・ムダ (副王¹⁹) は、まずダエン・マレワ五兄弟から選出する。それ以降のラジャ・ムダはこの五兄弟の子孫から選出する。

③王は妻の如く振る舞う。例えば与えられるのを待つて食事を取るように。

④ラジャ・ムダは夫の如く振る舞う。どんな協議事項についても、まずラジャ・ムダの意向を尊重する。

⑤以上の事項は変更されることなく、子々孫々に継承される。

これがジョホール・リアウ王国においてムラユ人とブギス人の忠誠誓約〔Perjanjian Sumpah Setia〕と呼ばれた誓約である。この誓約では、ムラユ人の王位継承、ブギス人の副王位継承、王のシンボルの地位、副王の全権掌握など、彼らが創始したジョホール・リアウ王国の基本体制が言及されている。したがって、ラジャ・スライマンとダエン・マレワ五兄弟の君臣関係やジョホール・リアウ王国の形成は、この時点ではほぼ確定されたといつてよい。

その後ジョホールのレガリアは、シアクに進撃したダエン・マレワ五兄弟によって奪回された。こうして一七二二年一〇月、ラジャ・スライマンの即位儀礼が挙行され、新王はスルタン・スライマン・バドル・アル・アラム・シャー(Sultan Sulaiman Badr al-Alam Syah; 在位一七二二〜六〇年)と称した。続いて初代ブギス人副王ダエン・マレワの即位儀礼が挙行され、副王はスルタン・アラウツディン・シャー・イブン・オブ(Sultan Alauddin Syah ibn

Opu)と称した(GM dl. 7: 618; TN: 217)。この時、ダエン・マレワは、ブギス人の伝統的な忠誠儀礼アルツ(aruk)を自ら挙行し、王国統治の代行と忠誠とを新王に宣言した。それから、今度は副王の兄弟以下のブギス人が、順次アルツ儀礼を挙行して副王への忠誠を表明したという(TN: 216)。つまり、上で述べた忠誠誓約を確認しあつたわけである。忠誠誓約は、こうした儀礼を通してジョホール・リアウの副王交代の度に更新された。その後、ブギス人副王の兄弟などとムラユ人王族との間に五組の縁組が結ばれた(PSNJ: fol. 12-13)。こうしたムラユ王家とブギス副王家間の婚姻連帯は、ジョホール・リアウ王国成立以降も続くことになる(A. Samad Ahmad 1985: 5-11, 13-21, 24)。

以上のように、ジョホール・リアウ王国は、ジョホールのムラユ人王族とリンギのブギス人勢力との誓約をもとに形成された王国であつた。

三二一 ジョホール・リアウの隆盛

ジョホール・リアウの成立初期、シアクのラジャ・クチルは、依然飽くなき野心をこの王国に対して抱き続けていた。ラジャ・クチルは、一七世紀中頃まで、再三にわたって王都リアウへの進攻を試みてゐる(PSNJ: fols. 13, 16, 19,

21)。そのため、新王国成立後も、シアクとの紛争がリアウはじめ各地で展開された。こうした紛争において活躍したのは、副王配下のブギス人戦士であった。一七二一年当時ダエン・マレワの艦隊はわずか五〇隻であった(GM. dl.: 599)。ところが、二年後には、マレー半島各地のブギス人から軍資金、武器や戦士の供与を受けたこともあり、彼の艦隊は一〇〇隻余りに急増した(ibid.: 652)。また彼は、一七二一年までに南スラウエシのボネ王国と友好関係を確立しており、同王国からブギス人戦士の派遣を受けていた(ibid.: 562)。海戦に熟練していたジョホール・リアウのブギス人戦士は、こうした戦力の充実も加わって、対外戦争に常に勝利をおさめた。ブギス人の副王や副王代理は、このような紛争時に指揮官として活躍したばかりではなく、平常時には自ら精力的に地方巡視を行い領内の治安維持に努めたのであった(TN: 310-11, 327)。

リアウの交易は、第二代副王ダエン・チェラツ(在位一七二八〜四五年)の交易振興策が功を奏し、一七三〇年代から発展に向かった。この副王の時代には、まず度量衡の統一が実施された(SMDB: 178)。また、ブギス人交易商人には、関税や停泊税の免除という優遇措置が実施された(Netscher 1854: 185)。この優遇策に誘引され、マルク諸島、ボルネオ、スマトラ、ウジュン・サラン(ブーケット

島)などの商品を積載したブギス人の交易船がリアウに來港した(Lewis 1970: 115-16)。しかし、ダエン・チェラツの交易振興策のもっとも画期的であった点は、リアウを商品作物の生産・輸出地としたことであろう。リアウのガンビール栽培は彼の時代に始まり、リアウには大小数百の農園が開かれた。やがてリアウではコシヨウ栽培も盛んとなった²¹⁾。この他、一七四三年頃までにマレー半島のスズ主産地がこの王国の支配下におかれ、そのスズの大半がリアウで取引された(PSNI: fols. 41-42)。こうしてリアウの交易は発展を遂げ、一七六〇年代以降はイギリス人カントリー・トレーダーの重要な寄港地となった(Basset 1964: 122-23; Lewis 1970: 114-15)。また、一七八〇年代には中国船も多数リアウに入港した。その結果、リアウでは、主にアヘン、スズ、コシヨウ、インド産綿織物、中国製品などの商品が盛んに取引されるようになった(Harrison 1953: 56-62)。その当時のリアウの交易の隆盛は、バタヴィアのオランダ東インド会社本部を大いに危惧させる程であったという(Lewis 1970: 117-18)。

交易の隆盛と並行して、リアウはイスラームの中心地となった。副王ダエン・チェラツの時代、リアウ在住のアラブ人ウラマーは数百人に上ったといわれる(SMDB: 177)。そのため、トレンガヌなど近隣地域出身の多数のムスリム

が、イスラーム修学のためリアウに滞在していた (PSNJ: fol. 47)。このような交易とイスラームの隆盛は、東南アジア内外の多様な人々をリアウへ引き寄せた。一七八〇年頃、王都周辺の人口は、ムラユ系とブギス系の在地住民だけで約九〇、〇〇〇人を数えたという (TN: 390)。アラブ人、華人系農園労働者などの外国人居留民を加えれば、おそらくリアウの人口は一〇〇、〇〇〇に達していたと考えられる。リアウは間違いなく前近代の島嶼部東南アジアにおける大都市のひとつであった。

以上のように、副王位を占めたブギス人の活躍によって、一八世紀ジョホール・リアウは東南アジア有数の繁栄を誇った。しかし、この世紀の末期、オランダと紛争したブギス人が退去していた間には、この王国の交易は完全に衰退状態に陥った。ジョホール・リアウが繁栄を回復するのは、そのブギス人が復帰してからである。ジョホール・リアウとは、まさしくブギス人によって存続した港市国家であった。

四 海民とムラユ人港市支配者

以上のような事例を踏まえた上で、ここではムラユ港市国家における海民と港市支配者の関係について、若干の考

察を試みたい。

まず確認しておきたいのは、本稿で扱ったムラユ港市国家が、ムラユ人王族と海民の結びつきを基礎に成立していることである。その結果、新たに形成された国家には、ムラユ人王族の王位継承、海民が支配階層の一定数を占める、海民首長の行政権掌握、海民集団を中核とする軍事力などの共通点が認められた。つまり、行政や軍事の中核を占めたのは海民であったが、これはムラユ人王族と海民首長とが権威と権力を分け合う体制といつてよい。こうした両者の相互依存関係は、両者間に繰り返された婚姻連帯によっても明らかである。

もちろんこうした相互依存関係は、既存の港市国家支配者とその周縁部に位置した無頼の海民集団の間にも、十分成り立ちうるものである。港市支配者の視点に立てば、海民を懐柔し、取り込むことは、港市国家発展の前提条件であった。交易活動の安全性を外來商人に保証するためには、彼らの海賊行為を制御することが必要不可欠であったからである。また、海民を臣属させることができれば、港市支配者は近隣諸国に対して軍事的優勢を確立することができた。そうした場合、バロスが言及しているように、臣下の海民集団を使って近隣諸港市の交易に壊滅的打撃を与え、自己の港市の発展を画策することも可能であった。他方、

無頼の海民集団は、港市支配者へ服属することで、経済的報酬、位階や称号などの名誉、保護やその他の便宜供与を引き出すことができた²⁶⁾。多数のオラン・ラウト集団が拠点を構えたマラッカ海峡の南域では、港市支配者から称号を獲得した首長が、絶大な影響力を行使していたという(Andaya, L. Y. 1984: 45-50)。もっとも、これに関しては、外部の権威者とみなされた港市支配者が、位階や称号の授与を通してオラン・ラウト諸集団をコントロールしようとしていたという解釈も当然成り立とう。だが、そうだとすると港市支配者とオラン・ラウト集団が相互依存関係にあったことには違いない。

ここで「なぜオラン・ラウトたちは、零落したパラメスワラが授与した貴族の地位に満足したのか」検討してみよう。先に指摘したように、パラメスワラの授与した貴族の地位は、確かに実質的内容の伴わないものであった。だが、「報酬」や「名譽と慈悲」を要求するオラン・ラウトの発言に今一度注目してみると、彼らが既に新たな王国を構想し、その実現に動き出していたことが読み取れる。そうした彼らに貴族の地位を授与することは、必然的にその新王国構想への同意を意味する。その同意によって、パラメスワラに同行したオラン・ラウトの行動は、初めて積極的な意味を付与され、明確な目標をもつに至ったことに留意したい。

パラメスワラの「名目的」な地位の授与が「十分な」報酬と了解されたのは、まさしく上記のような理由からであったと考えられる。その後、「名目的」な地位を実質的なものとするべく、実際に王国の樹立に奮闘したのも、当然彼らオラン・ラウトであったに違いない。しかし、結局王位を占めたのは、オラン・ラウト首長ではなく、彼らの構想に同意したに過ぎないムラユ人王族であった。だがそれは、むしろ海民側が、彼らの活動全般を認知し、正当化する外的権威としてそうした「貴人」を常に必要としていたことによるものであろう。先に指摘したように、ムラユ人王族と海民首長とが権威と権力を分け合う体制は、他のムラユ港市国家にもみられる特徴だからである。

最後に「ジョホルルのオラン・ラウト集団がムラカ正統のジョホルル王に忠誠を捧げた理由」について若干検討してみよう。既に指摘したように、彼らはムラカ王家正統のジョホルル王を超自然的力の所有者とみなしていた。ここでの問題は、このような王権の観念がなぜオラン・ラウトにこれほど決定的な影響を及ぼしたかという点である。O. W. ウォルターズは、パラメスワラとオラン・ラウトの関係をアビシエーカ(abhiseka)という聖別儀礼によって説明する。オラン・ラウトたちがパラメスワラに同行したのは、パラメスワラがパレンバン出奔前に挙行了したその儀礼

の意味を彼らが理解していたからであるとウォルタースは主張する (Wolters 1970: 139-40)。アンダヤも、この説にしたがってムラカやジョホルルのオラン・ラウトの絶対的忠誠を説明している (Andaya, L. Y. 1975: 45)。ところが、アビシエーカとは、僧の入壇式や王の即位儀礼で広く行われた灌頂儀礼をさし (田中 1986: 6)、特定のムラユ諸国だけで行われた儀礼ではない。ちなみに、マレーシアのペラ州では、今日なおこうした儀礼がスルタンの即位儀礼中に舉行されている (Kenangan Pertabalan Raja Kia Ke-34 1986)。それゆえ、オラン・ラウトの忠誠の不変を説明するためには、さらに別の要因が必要となる。これについてはいくつかの要因が考えられよう。しかし、おそらくそうした諸要因の中でもっとも重要なのは、ムラカがポルトガル人に世界随一と評された程の栄華をきわめた港市国家であったことであろう。その繁栄は後世に語り継がれ、『ヒカヤット・ハン・トゥア』(Hikayat Hang Tuah)とくわ長編の物語⁽²⁸⁾まで生み出した。そして、後継のジョホールも、ムラカほどではないにせよ、一七世紀後半には東南アジア有数の繁栄を達成した。こうした繁栄は、いずれもムラカ王家とその正統子孫の下で現出されたものである。マラッカ海峡域では、他に一七世紀前半のアチェも東南アジア有数の繁栄を現出したが、そのアチェもそれ以降は繁栄を再

現できなかった。おそらく、このような異例の繁栄が、王権の神聖性の觀念ダウラツと関連づけて理解され、オラン・ラウト臣下に受容されたに違いない。スルタン・マフムード弑逆事件後のオラン・ラウトが、王統の断絶に逆上し、パレンバン王家への忠誠のシフトを表明しながらも、結局彼らの多くがそれを断念したことに留意したい。ムラカ王家の直系子孫が絶えた後、彼らの献身的な奉仕に対して繁栄をもつて報いてくれる神聖王はもはやどこにも存在しなかった。したがって、彼らはやむなくジョホールに帰順するしかなかったのである。すなわち、オラン・ラウトは、ムラカやジョホルルの栄華が超自然的力ダウラツの顕現と了解し、ムラカ王家正統のジョホール王へ忠誠を捧げたいと推察される。

おわりに

本稿では、近世のマラッカ海峡南域に成立した三つの港市国家の事例を通して、海民と港市国家あるいは港市支配者との関係を論じた。その結論は次のように要約できよう。

- (1) マラッカ海峡南域の有力なムラユ港市国家は、いずれも海民との結びつきを存立の基盤とし、海民集団の力を背景に東南アジア有数の繁栄を達成した。

(2) これらの港市国家において、海民は軍事力の中核を担ったばかりではなく、その一部は支配層に抜擢されて行政の中核を占め、港市国家の発展に指導的役割を果たした。すなわち、それらの港市国家では、ムラユ支配者と海民指導層とが権威と権力を分有する体制が採られていた。

(3) オラン・ラウトのムラカやジョホールに対する不変の忠誠心は、おそらくその繁栄が、王権の観念と結びつけられて了解されたことによると考えられる。

本稿で扱った事例からは、スルー海域の事例研究とはひじょうに対照的な結論が導かれた。それがムラユ世界の港市国家に共通するものか、あるいはこの地域の港市国家に固有なものであるか解明するためには、ボルネオなどの事例を通して検討する必要がある。また、海域世界における人々の相互関係や地域世界の形成という観点からは、ムラユ港市支配者と内陸の森の民との関係も明らかにする必要がある。今後は、こうした点について分析を進めた上で、あらためてムラユ港市国家を論じてみたい。

註

(1) 港市国家は、一九世紀までに成立した東南アジアの諸国家に適用可能なものとして提出された国家類型である。その主な特徴は次の点にある。①河口に形成される港市と王都が同一地点を占めるかまたは近距離に位置し、両者が緊密な関係で結ばれている。②農業と交易の共生的関係。③港市の所在地が同時に文化的中心でもある (Kathirithamby-Wells and Villiers 1990: 3-5)。この国家類型は、前近代の東南アジア諸国の空間的構造を端的に表現していることから、現在わが国ではその時代の国家に言及する場合に多用されている。なお、この国家類型の詳細に関しては、(鈴木 1996)を参照せよ。

(2) 一五世紀中頃以降の東南アジアは、マルク諸島産の香料やコシヨウに対する域外からの需要増大によって空前の交易ブームを経験した。この交易ブームが、物質文化の享受、王権の強化、新たな宗教や軍事技術の導入などを東南アジア社会にもたらしたと指摘され、その交易ブームの時代を「交易の時代」(age of commerce; 一四五〇～一六八〇年)と呼ぶことが提唱された (Reid 1988 and 1993)。しかし、その後そうした現象は「交易の時代」の前後にも起きていることが明らかにされ、現在は「近世」(一五～一八世紀頃)という時代区分が新たに提起されている (Reid 1993a: 1-19)。

(3) 東南アジア地域を対象を限定したものではないが、(Chandhuri 1985) (家島 1991) などともこうした研究に位置づけられよう。なお、東南アジアの「海域世界」については、(前田 1992)を参照せよ。

(4) 例えば、(富沢 1997) (立本 1998) (鶴見 1998) や本文

で紹介する床呂の研究などがある。

- (5) 現地語の文献資料は、港市国家の支配者側に叙述の焦点が当てられており、海民に関する記述が少ない。他方、海民に関する欧文の文献資料では、彼らがいかに港市国家に奉仕させられているかという点を中心に記されていることが多い。
- (6) ボルネオとフィリピン南部のバジャウを論じた(Sather 1971)・マレー世界とスラウエシンの事例を扱った(Andaya, L. Y. 1984)などがある。

- (7) ポルトガル語文献に記されている「セラテ」(Celates, Celates, Calates, Salates)は、「海峡」を意味するムラユ語「selat」に起源する語である。つまり、「セラテ人」とは「海峡の人」を意味するが、これはマラッカ海峡地域のオラン・ラウト(ムラユ語で「海の人」の意)をさす。なお、オランダ語文献でも、オラン・ラウトはこれと同様の呼称で言及されている(Mills 1930: 89-90)。

- (8) ムラユ語史料『スジャラ・ムラユ』(Sejarah Melayu)は、パレンバンに出現したムラカ王家の先祖が、ビンタン島・シガプーラを経由してムラカに到達したと述べている(SM: 58-82)。これは、ムラカ王家とこの2つのオラン・ラウト集団の主従関係の起源を説明するために構成された説話とも解釈できよう。ビンタン島の伝承によれば、同島のオラン・ラウトの王は、オラン・ビンタン・ダタン(Orang Bentan Datang)はムラカ王家の先祖とともに来島したオラン・ラウトの子孫であるとシウ(Schot 1889: 610-13)。
- (9) 他方、ポルトガル人ジョアン・デ・パロスは、ムラカの官僚層は、在地ムラユ人とオラン・ラウト出身の貴族で占められていたと述べている(パロス 1981: 10)。

- (10) ジョホール初期のオラン・ラウト戦士の数は不明である。オランダ人の推計によれば、一七一四年当時のジョホールの総戦士数は六五〇〇であったという。その内訳は、パハン沖の島々から七〇〇、リアウ島(ビンタン島の別称)から二〇〇〇、リンガ島から五〇〇、シアクとブンカリス島から四〇〇であった(Andaya, L. Y. 1975a: 78)。以上はすべてオラン・ラウトの多住地域だが、特にシアクとブンカリス島以外は、マレー半島南部からリアウ・リンガ諸島に至る地域の中に位置した。L. Y. アンダヤは、この推計をもとに、ジョホールのオラン・ラウト戦士の比率を、四分の一以上と算定している(ibid.: 78)。これは上記の諸地域の戦士の半数をオラン・ラウトと仮定したもので、かなり控え目の算定である。実際には、上記地域の戦士数三六〇〇の大半がオラン・ラウトと推定され、その場合には、ジョホール戦士の五〇%前後をオラン・ラウトが占めたことになる。

- (11) ジョホールは、ポルトガルには一五三六年と一五八七年に、またアチエには一五六四年、一五七〇年、一六一三年、一六一五年、一六二三年の五回にわたり進攻され、王都を徹底的に破壊された。特に一六一三年のアチエ進攻の際には、王以下の主だった王族や貴族を捕虜として連れ去られた(Winstedt 1979: 18-19, 21, 24, 32, 35)。

- (12) 進攻してきたラジャ・クチルの艦隊は三十隻で、武器の装備はかなり貧弱であったらしい。他方、ジョホールの艦隊は七十隻を越えていたという(Hughes 1935: 129)。

- (13) 『トーフアント・アル・ナーフィス』は、ジョホール・リアウ王国のブギス系王族の子孫が一九世紀中頃に記した同王国に関する歴史叙述作品である。この作品の詳細については、

近世のムラユ港市国家と海民（西尾）

(Matheson 1971) を参照せよ。

- (14) 『トーフアット・アル・ナーフィス』や『ヒカヤット・シアク』の叙述によれば、ラジャ・クチルは、スルタン・マフムードと契りを結んだラクサマナの息女が弑逆事件後に産み落とした子とされる。誕生後、彼は密かにミナンカバウ王家のもとへ送られ、その庇護の下で成長したという (TN176:77, 184-86; HS: 111-24)。

- (15) 『ヒカヤット・シアク』は、ラジャ・クチルがスマトラ東南岸に創始したシアク王国に関する歴史叙述である。この作品は、シアクの王族トウン・サイト (Tun Said) によって一九世紀中頃に記された (Tenku Iskandar 1995: 573-78)。

- (16) ダウラツ (daulat) は、「交替・変化・権力・王朝・国家」などを意味するアラビア語の *dawla* に由来するムラユ語である (Beg 1983: 163)。ただし、この語で表現された觀念は、本来東南アジアの土着社会に起源するものである。それにインドウ文化やイスラーム文化の影響が加わって形成されたのがダウラツの觀念である (Andaya, B. W. 1975: 25-8; 西尾 2001: 27)。

- (17) ラジャ・イスカンダル・ズルカルナインとは、いわゆるアレキサンダー大王のことである。『ユーラン』にも記されているように、彼の超人的な伝説はイスラーム世界にも伝えられ、ついにはイスラーム布教の英雄とみなされるに到った (Smail Hamid 1983: 142-3)。

- (18) 『トーフアット・アル・ナーフィス』などのムラユ語文献は、後にジョホール・リアウの副王となるダエン・マレワを南スラウエシのルウ (Luwu) 王国出身の王族として記す (TN: 150; SMDB: 8; A. Samad Ahmad 1985: 1)。だが、実際

には、ワジョ (Wajo) 王国の属国であったパマンナ (Pammana) またはラムル (Lamuru) の王族であったらしい (Raja Ali Haji: ibn Ahmad 1982: 318)。

- (19) ラジャ・ムダ (若き王) の意) は、本来次期王位継承者の称号であった。だが、この誓約が示すように、ジョホール・リアウでは、ブギス人王族の就任する副王位を意味した (Matheson 1975: 13-16)。

- (20) この初代副王の忠誠誓約は、第二代副王ダエン・チェラツ (Daeng Celak: 在位一七二八〜四五年) 就任時に、オラン・ラウトと一部属領の支配権をムラユ人王族へ委譲する内容に修正された。その時から第一次オランダ―ブギス戦争 (一七五六〜七年) 直後までの期間及び一八〇四年以降は、第二代副王の忠誠誓約が用いられ、それ以外の期間には初代副王の忠誠誓約が採用された。なお、前者は「ユタで崩御した副王の慣習」(Adat Marhum Mangkat di Kota) と呼ばれ、後者は「スンガイ・メルで崩御した副王の慣習」(Adat Marhum Mangkat di Sungai Baru) と呼ばれた (Netscher 1870: 68, Biragen IX, XV, XVII; TN: 468)。

- (21) 歴代のブギス人副王は、この称号を使用した (A. Samad Ahmad 1985: 29)。

- (22) アル (aru, aruk) 儀礼では、誓約者が短剣または剣を抜き、舞いながら忠誠を誓った (Cense 1966: 424-5)。この儀礼の様子は、ジョホール・リアウのヒカヤットでも描写されている (TN: 200, 216, 381, 420)。一七世紀南スラウエシの事例については (Andaya, L. Y. 1981: 291-2) を参照せよ。

- (23) 註 (20) を参照せよ。
- (24) 一八三五年のシンガポールの交易統計によれば、リアウ産

ガンビールの輸入量は一二、〇九七ピクル(二ピクルⅡ約六二・五kg)で、これはその年のガンビールの総輸入量の約八九%を占めた。一方、リアウ産コシヨウの輸入量は一二、六八二ピクルで、コシヨウの総輸入量の約六〇%を占めていた(Newbold 1971 vol. 1 : 297, 302)。

(25) 人口希薄地域であった東南アジアでは、一九世紀中頃までに人口一五万人を越えた都市はひじょうに少なく、しかもそのほとんどは大陸部に形成された都市であった。前近代期には人口一〇万人規模の都市も少数に留まり、全盛期のムラカの人口も約一〇万人であったと推定されている(坪内 1986: 57)

(26) バロスは、オラン・ラウトの艦隊を動員し、マラッカ海峡を航行する商船が他の港市へ向かうのを妨げ、ムラカへの入港を強制したことを、ムラカ発展の原因としている(バロス 1981: 10)

(27) 一八〜一九世紀の欧文記録によれば、スールー海域のバジャウは、各地の権威者と直接・間接的にパトロン・クライアント関係を結ぶことによって、交易活動と身の安全の保証を得ていた。このパトロン・クライアント関係は、クライアント側から断ち切るこの可能なものであり、搾取されていると感じた時には、バジャウはそのパトロンのもとから逃げ去るのが普通であった。ただし、その場合には絶えず新たなパトロンが探し求められたという(富沢 1997: 246)。

(28) マラッカ海峡の南域では、ダト・ラジヤ・ナガラ(Dato Raja Nagara)やオラン・カヤ・トゥメンガン・マバル(Orang Kaya Temenggung Mabar)などの称号を所有したオラン・ラウト首領が絶大な権威を誇っていた(The Piracy

and Slave Trade of the Indian Archipelago 1849: 634-35)。例えば、一七世紀初期当時、前者はシンガプーラに拠点を構えていたが、その権威はリアウ諸島全域に及んでいた。他方、後者はリンガ諸島において権威を確立していたという(Andaya, L. Y. 1984: 47)。本文中の『ヒカヤット・シアク』の引用部分に登場するラジヤ・ヌガラ・スラットは、おそらくこのダト・ラジヤ・ナガラのことであろう。

(29) ムラカの初代のラクサマナに拔擢されたハン・トゥアの口頭伝承がヒカヤットの形にまとめられたのは、一八世紀初期頃と推察される(西尾 2001: 34)。このヒカヤットのハン・トゥアは、武術・占術・言語・外交儀礼に精通し、王に忠誠を捧げる人物で、彼の外交使節としての活躍を中心にムラカの盛衰が述べられる。このハン・トゥアは、一般に、傑出した能力を背景に異例の出世を果たしたオラン・ラウトとイメージされている。ところが、一九世紀に編纂された『スジャラ・ムラユ』や『トーファット・アル・ナーフィス』では、南スラウエシのゴア王国からムラカ王へ献上されたプギス人王族ダエン・ムンパウ(Daeng Mempawah)と記されている(SMd: 100-5; TN: 134)。彼をプギス人王族の出身とする記述は、一八世紀以降のプギス人のムラユ諸国への介入を正当化するために創作されたものに違いない。とはいえ、オラン・ラウトとプギス人がともに海域世界において卓越した能力を発揮したことを示唆している点で、非常に興味深い。

略号

ARA: Algemeen Rijksarchief

BKI: Bijdragen tot de Taal, Land- en Volkenkunde van

- het Nederlandsch-Indië
 DBP : Dewan Bahasa dan Pustaka
 FB : Fajar Bakti
 GM: Coolhaas, W. Ph. ed. 1960 etc. *Generale Missieven van Gouverneur-Generaal en Raden aan Heren XVII der Vereendigde Oostindische Compagnie. (deel I-IX).* s-Gravenhagen
 HS: Muhammad Yusoff Hashim ed. 1992 *Hikayat Siak.* KL : DBP
 ISEAS : Institute of Southeast Asian Studies
 JIA: Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia
 JMBRAS: Journal of the Malayan/Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society
 JSBRAS : Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society
 JSEAS : Journal of Southeast Asian Studies
 KL : Kuala Lumpur
 MBRAS : The Malayan Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society
 OUP : Oxford University Press
 PJ : Petaling Jaya
 PSNJ: Kratz, E. U. ed. 1973 *Peringatan Sejarah Negeri Johor: Eine malaisische Quelle zur Geschichte Johorsim 18. Jahrhundert.* Wiesbaden : Otto Harrassowitz
 SMD : A. Samad Ahmad ed. 1986 [1979] *Sulalatus Salatin (Sejarah Melayu).* KL : DBP
 SMdB: Mohd. Yusof Md. Nor ed. 1984 *Sisilah Melayu dan*

- Bugis.* PJ : FJ
 SMR: Winstedt, R. O. 1938 "Sejarah Melayu" *JMBRAS* 16 (2) (3)
 SMs: Shellabear, W. G. ed. 1975 *Sejarah Melayu.* PJ : FB
 TBG: Tijdschrift voor Indische Taal, Land- en Volkenkunde van het Bataviaasch Genootschap van Kusten en Wetenschappen
 TN: Hooker, B. M. 1991 *Tuhfatul Nafis: Sejarah Melayu-Islam.* KL : DBP
 VOC : Vereendigde Oostindische Compagnie
- 参考文献
 (註) [] 本邦書籍又は邦文の事
 Andaya, B. W. 1975 "The Nature of the State in Eighteenth Century Perak." in: Reid and Castles 1975
 and Andaya, L. Y. 1982 *A History of Malaysia.* London : Macmillan
 Andaya L. Y. 1975 *The Kingdom of Johor 1641-1728.* KL : OUP
 1975a "The Power Structure in 17th Century Johor" in : Reid and Castles 1975
 1981 *The Heritage of Arung Palakka.* The Hague : Martinus Nijhoff
 1984 "Historical Links between the Aquatic Populations and the Coastal Peoples of the Malay World and Celebes." in : Muhammad Abu Bakar, Amarjit Kaur, Abdullah Zakaria Ghazali eds. *Historia:*

- Essays in Commemoration of the 25th Anniversary of the Department of History, University of Malaya.* KL : The Malaysian Historical Society.
- A. Samad Ahmad ed. 1985 *Kerajaan Johor Riau*. KL:DBP
- Basset, D. K. 1964 "British Commercial and Strategic Interest in the Malay Peninsula during the late Eighteenth Centuries." [in: Bastin, J. and Roolvink, R. eds. *Malayan and Indonesian Studies* Oxford: Clarendon]
 シロバノシロモノ・キニ九八一『シロモノ・キ・シロバノシロモノ』三友社
- Beg, M. A. J. 1983[1977] *Arabic Loan-Words in Malay*. KL: University of Malaya Press
- Brown, C. C. tr. 1983 [1970] *Sejarah Melayu or Malay Annals*. KL: OUP
- Bruyn Kops, G. F. de 1854 "Sketch of the Rhio-Lingga Archipelago" *JIA* 8
- Cense, A. A. 1966 "Old Buginese and Macassarese Diaries." *BKI* 122
- Chaudhuri, K. N. 1985 *Trade and Civilization in the Indian Ocean, an Economic History from the Rise of Islam to 1750*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gibson-Hill, C. A. 1955 "Johor Lama and Other Ancient Sites on the Johor River." *JMBRAS* 28 (2)
- Hamilton, C. A. 1930 [1727] *A New Account of the East Indies, (2 vols)*. London, vol. 2
- Harrison, B. trd. 1953 "Trade in the Straits of Malacca in 1785, A Memorandum by P. G. de Brujin Governor of Malacca." *JMBRAS* 26 (1)
- 引未雅十一九九九「東國へシムノ港市國家之後背地」佐藤次高
 邦本義経編『東城の世界史』中巻の地域史』山川出版社
- Hooykaas, C. 1947 *Oer Maleise Literatuur*. Leiden: Brill
- Hughes, T. D. 1935 "A Portuguese Account of Johore." *JMBRAS* 8 (2)
- Ismail Hamid 1983 *The Malay Hikayat*. Bangi : Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia
- Kashim Ahmad ed. 1991[1964] *Hikayat Hang Tuah*. KL: DBP
- Kathirithamby-Wells, J. and Villiers, J. 1990 *The Southeast Asian Port and Polity, Rise and Demise*. Singapore : Singapore University Press.
- Kengangan Pertabalan Raja Kita Ke-34*. 1986 Taiping
- Lewis, D. 1970 "The Last Malay Raja Muda of Johor." *JSEAS* 13 (2)
- Lineon, J. 1975 "Pasompe' Ugi' : Bugis Migrants and Wanderers." *Archipel* 10
- Logan, J. R. 1847 "The Ethnology of the Johore Archipelago." *JIA* 1
- 前田茂文一九六二「海峽(マレー)群島」矢野龍雄『講座東洋
 マレー群島』東洋館、東洋学協会編、引未雅
- Matheson, V. 1971 "The Tuhfat al-Nafis : Structure and Sources." *BKI* 127
-1975 "Concepts of States in the Tuhfat al-Nafis." in : Reid and Castles 1975
- Mills, J. V. 1930 "Friedia's Description of Malacca,

近世のムラユ港市国家と海民(西尾)

- Meridional India and Cathay. ” *MBRAS* 8 (1)
Muhammad Yusoff Hashim 1989 *Kesultanan Melayu
Malaka*. KL: DBP
Netscher, E. 1854 “ Beschrijving van een gedeelte der
residentie Rouw ” *TBG* 2
……………1870 *De Nederlanders in Djoehor en Siak 1602 tot
1865*. Batavia: Bruining & Wijt
Newbold, T. J 1971[1839] *Political and Statistical Account
of the British Settlements in the Straits of Malacca.*
(2vols). KL: OUP
西尾寛治一九九〇「シヨホール王国史上の転換点——スルタン・
マブムーン殺害事件(一六九九)について」『東方学』七九
……………一九九五「ムラカ王権の形成——海上民の役割の分析を
中心に」『南方文化』二二
……………二〇〇一「近世ムラユ王国の歴史的展開——ムラカ、シヨ
ホール、シヨホール・リアウの分析から」『東南アジア——歴
史と文化』三〇
Pelras, C. 1996 *The Bagis*. Oxford: Blackwell Publishers
“The Piracy and Slave Trade of the Indian Archipelago.”
1849, *JJA* 3
ジュンスタマ(生田)池上・加藤・長岡訳注)一九六六『トメ・
ジュンスタマ』東方諸国記』岩波書店
Raja Ali Haji ibn Ahmad (Matheson, V. and Andaya, B.
W. tr.) 1982 *The Precious Gift (Tuhfat al-Nafis)*. KL:
OUP
Reid, A. 1988 and 1993 *Southeast Asia in the Age of
Commerce 1450-1680*, (2 vols.), New Heaven: Yale

- University Press
……………ed. 1993a *Southeast Asia in the Early Modern Era*.
Ithaca: Cornell University Press
……………and Castles, R. eds. 1975 *Pre-Colonial State Systems
in Southeast Asia*. KL: MBRAS
Sather, C. 1971 “ Traditional States of Borneo and the
Southern Philippines. ” *Borneo Research Bulletin* 3(2)
Schof, J. G. 1889 “ Bijdrage tot de Kennis van Oud
Bintan. ” *TBG* 32
Skeat, W. W. 1965 [1900] *Malay Magic*. London: Frank Cass
Sopher, D. E. 1965 *The Sea Nomads: A Study based on the
Literature of the Maritime Boat People of Southeast
Asia*, Memoirs of the National Museum, Singapore
鈴木恒之一九九八「東南アジアの港市国家」『岩波講座世界の歴
史13 東アジア・東南アジアの伝統社会の形成』岩波書店
立本成文一九九八「流動「農」民ブギス」秋道智彌編『海人の
世界』同文館
Tambiah, S. J. 1976 *World Conqueror and World
Renouncer*. Cambridge: Cambridge University Press.
田中雅一 一九八六「礼拝・スピリチュアル・供犠——浄・不浄から
カハ・スリランカのヒンドゥウ寺院儀礼」『民族学研究』五二—
Teuku Iskandar 1995 *Kususastaan Klasik Melayu
Sepanjang Abad*. Brunei: Universiti Brunei Darussalam
床呂郁哉一九九二「海のエスノヒストリー——スルー諸島に
おける歴史とエスニシティ」『民族学研究』五七一—
……………一九九九「現代人類学の射程——越境・スルー海域世
界から」『岩波書店』

富沢寿男一九八七「社会構造と国家」伊藤・関本・船曳編『現代の社会人類学三』東京大学出版会

……………一九九七「東南アジア海域世界の国家と海洋民」塩田光

喜編『海洋島嶼国家の原像と変貌』アジア経済研究所

坪内良博一九八六『東南アジア人口民族誌』勁草書房

鶴見良行一九九八「海を渡る人々——島嶼東南アジアにおける

観察」秋道智彌編『海人の世界』同文館

Wilkinson, R. J. 1932 *A Malay-English Dictionary (2 parts)*.

Mytilene : Salavopoulos and Kinderlis

Winstedt, R. O. 1979 *A History of Johore*. KL : MBRAS

Wolters, O. W. 1970 *The Fall of Srivijaya in Malay*

History. KL : OUP

……………1982 *History, Culture, and Region in Southeast Asian*

Perspectives. Singapore : ISEAS

家島彦一 一九九一『イスラム世界の成立と国際商業——国際商

業ネットワークの変動を中心に』岩波書店

山本博之二〇〇〇「される側から見た『越境』」『アジアアフリカ

言語文化研究所通信』九九

〔付記〕

本稿は一九九八～九年度財団法人大和銀行アジア・オセアニア財団研究助成金による研究成果の一部である。

(立教大学非常勤講師)